

# 改めて漢文教育の意義を考える

— 次期学習指導要領「言語文化」の考察を踏まえて —

狭山ヶ丘高等学校  
樋口 敦士

2021年7月4日（日）日本文学協会  
第40回研究発表会資料

# 「改めて漢文教育の意義を考える」 (要旨)

- ① 私の考える漢文教育の意義
- ② 古典授業の実態
- ③ 新科目「言語文化」について
- ④ 小林秀雄の古典観（『論語』より）
- ⑤ 文体とは・文体意識・明治時代の文体観
- ⑥ 日本人の漢語観・素読観・漢文訓読論
- ⑦ （漢文）故事成語の受容（「百聞は一見に如かず」）
- ⑧ 古典教材における文体とは・現代における文体意識
- ⑨ 結論として

# 私の考える漢文教育の意義

(一) 道徳的側面 → △ = 思想教材を中心とした教訓的受容

(二) 反証的側面 → ◎ = 通念（一般論）に対する批判的受容

(三) 文体的側面 → ◎ = 漢文訓読による文体的受容（古典文法）

(四) 趣向的側面 → ○ = 翻案小説などを通じた文学的受容

(五) 語彙的側面 → ○ = 漢字・漢語などの言語的受容

\* (四) ・ (五) ばかりが強調されてはいないか？

# 古典授業の実態

- ・ 内容解釈（読解） → 生徒が親しみをもちやすい??
- ・ 文法・句法（形式） → 生徒は苦手意識を持つ??

なぜ古文法、漢文句法を扱う必要があるのか？

（わざわざ文語文体を扱わずとも現代語訳でもよいのではないのか）

→ 古典教育における文体意識の欠如

# 新科目「言語文化」とは

(我が国の言語文化への理解を深める科目)

## 国際社会に対する理解



## 自らのアイデンティティー

先人が築き上げてきた伝統と文化の尊重・豊かな感性や情緒の涵養・我が国の言語文化に対する幅広い知識や教養を活用する資質・能力の育成の必要性

上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼が置かれる。(古文+漢文+ (近)現代の文学作品)

(次期「高等学校学習指導要領」では、「言語文化 3 内容」に「古典を読むために必要な文語の決まりや訓読のきまり」・「古典特有の表現」・「歴史的な文体の変化」などの事項がある)

# 「言語文化」 (目標)

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(一)生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。

(二)論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(三)言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。 **言葉がもつ価値**

(平成三十年〈二〇一八〉三月告示「高等学校学習指導要領」)

# 小林秀雄の古典観

## 『白鳥・宣長・言葉』（昭和三十三年〈一九五八〉）

論語に限らず、古典に近づくには、知識だけでは足りず、感動や愛情を必要とするのは、今も昔も変わらないといふことである。現代人は、歴史的とか進歩とかいふ考へに慣れ切つてゐる。平たく言へば、あの人は偉い人かも知れないが、もう古い、と考へ、古いかも知れないが偉い人だとは考へたがらないのである。古典といふ言葉の意味は、後の方の考へ方からしか生きて来ない。古典とは、もともと反歴史的な概念なのである。古典とは、私達が、回顧の情をもつて近づく生きて考へた優れた人間の姿なのであつて、分析によつて限定する過去の一思想の歴史的構造ではない。従つて、古典とは、理解されるといふより、むしろ直覚されるものだ。近代の科学的歴史観が、古典といふものに関して、現代人の躓きの石となつてゐることは争はれぬ事実のやうに思はれる。歴史といふものの合理的な理解、歴史発展の、客観的な展望、曖昧な人間的な原理の内在を許さぬ歴史の論理、さういふ考へ方の傾向のうちからは、古典といふ言葉は、どうしても姿を消さねばならない。

# 文体とは

→ 文章の様式。口語体・文語体・漢文体・和文体など。

(ロラン・バルト「ラング」・「スティル」・「エクリチュール」)

▶ わかりやすいものでは、ミュージカル・ラップ・お経・謡曲・歌舞伎・漢詩（訓読）などがこれに相当するか。

\* 「引用型故事成語」 もこれに含まれるのではないか？



# 文体意識（近世から近代へ）

## 【近世における漢文（訓読）体批判】

（儒学者）

新井白石『東雅』・荻生徂徠『訳文筌蹄』『学則』

（国学者）

賀茂真淵『国意考』・本居宣長『玉あられ』・伴蒿蹊『国文世々の跡』

## 【近代における文体意識】

坪内逍遙『小説神髓』・福地源一郎『国民の友』『明治今日の文章』

## 【訓読文体批判】

（中国文学者）

青木正兒『支那文学論叢』『漢文直読論』（大正九年〈一九二〇〉）・倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』（昭和十六年〈一九四一〉）・高島俊男『漱石の夏やすみ 房総紀行「木屑録」』（平成十二年〈二〇〇〇〉）

# 明治時代の文体観

明治二十年（一八八七） 二葉亭四迷『浮雲』（言文一致体）

明治三十八年（一九〇五）『吾が輩は猫である』

明治三十九年（一九〇六）『破戒』・明治四十年（一九〇七）『蒲団』



**（自然主義文学隆盛期には「口語体」主流）**

明治二十七年（一八九四） 井上毅文部大臣「**尋常中学校ノ学科及其程度**」

「国語＝主・漢文＝従」

明治三十九年（一九〇六） 「**文法上許容スベキ事項・国語仮名遣改定案**」

**（普通文）** 漢文訓読体をもとに平安文法を混じた漢字仮名交じりの新たな文体

明治四十四年（一九一一） 「**中学校令施行規則**」・「**中学校教授細目**」改正

明治四十五年（一九一二） 「**漢文教授二関スル調査報告**」

（訓読による文体指導⇒ナショナリズムの形成⇒**戦後は批判の対象**）

# 日本人の漢語観

土居光知「明治時代の日本語の調子」（昭和十年〈一九三五〉）

日本人が漢語を愛好する理由

- (一)漢文の姿が眼に与える快感のため。
- (二)漢語が簡潔にして深遠な思想表現に適するため。
- (三)雄渾流麗な調子を得んがため。

# 素読について

前田愛『近代読者の成立』（昭和四十八年〈一九七三〉）

漢籍の素読はことばのひびきとリズムとを反復復誦する操作を通じて、日常のことばとは次元を異にする精神のことば—漢語の形式を幼い魂に刻印する学習課程である。 意味の理解は達せられなくとも文章のひびきとリズムの型は、殆ど生理と化して体得される。やや長じてからの講読や輪読によって供給される知識が形式を充足するのである。

# 漢文訓読論①

内野熊一郎『漢文漢字の教育』（昭和二十九年〈一九五四〉）

原文原形に即して、原作者の精神・情緒や美感に、直接触れながら、われらの国語（言葉）で読解することができたのであるから、便利この上もなかった。そこで、この訓読文によって、日本国語・国文や国字の生成発展は、急速に進歩した。国語・国文・国字に影響した訓読中国古典の力が絶大であるのは当然である。というよりも、むしろ訓読中国古典、即ち訓読漢文は、それ自体すでに国語・国文の一種である。ここに、漢文教科が国語教科と不離一体的性格を有つことが、明かとなろう。同時に、国語・国文・国字を助成した基盤であることも、明かにされると思う。

## 漢文訓読論②

阿部吉雄「古典教育の方向（漢文）」（昭和三十一年〈一九五六〉）

まず第一に、古典というものは厳密な意味で翻訳できないものであることを強調しておきたい。翻訳された古典、解説された古典は、翻訳者・解説者の主観によって解釈されたものであって、古典そのものではない。（中略）言語的障壁の多い古典にとりくんで、ことばの奥底にある作者の心はこうであらうか、ああであらうかと、自分の頭で考え、自分のことばになおしてゆく、その作業こそいちばん貴いのであって、ここにこそ古典教育の最大の意味があるのだと思う。さもなくて古典の表面的な意味を概念的に知るだけならば、古典学習に時間をかける必要は少しもない。

## 漢文訓読論③

長谷川滋成『漢文の指導法・第二版』（平成四年〈一九九二〉）

戦後の国語教育は、内容の理解指導に力がはいりすぎて、読みの指導がややおろそかにされているようである。先に述べたように、読むことが国語学習指導の出発であり、終着であることを改めて認識し直さなければなるまい。授業において、体系的・意図的な読みの位置づけ、習慣化が必要であろう。（中略）素読指導の最大の利点は、漢文口調に慣れ親しむことができることである。“口調に慣れ親しむ”ということは、漢文学習に興味関心を抱く第一歩である。意味内容はすぐに理解できなくてもよい。とにかく読む。そして、日本文や英文にはない、漢文特有のリズム・調子を感じ得ることである。読み進めていくうちに、学習者は、簡潔で、力強い、底の深い、ひきしまった表現に魅了されるにちがいない。

## 漢文訓読論④

齋藤希史『漢文脈と近代日本』（平成十九年〈二〇〇七〉）

訓読は、漢文という書記言語の解説と作成の技法として意味をもっていました。しかし、訓読のリズムが大衆的な拡がりを得ていくのと同時に、あるいはそれゆえに、漢文と訓読との分離が始まります。より正確に言えば、漢文から訓読が独立し始めます。そして、そうやってできあがった訓読体は、いわゆる文語文として、漢文に代わる公式文体として地位を獲得し、詔勅や法律はもとより、教育や報道の場でも用いられるようになったのです。いま、訓読体を文語文と言い換えたように、この文体は、さまざまな名称で呼ばれています。文語文、普通文、近体文、漢字片仮名交り文、などなど。あるいは、文語体、読み下し体、のように呼ばれることもあります。しかし実態は、おおむね同じものです。名称がまちまちなのは、文体としての出自、つまりそれが漢文訓読から派生した便宜的な一といって悪ければ実用的な一文体であることにかかわっています。漢文という古典文から、訓読体という実用文へ。



# (漢文) 故事成語の受容について

## ◆ 【引用型成語】 (発言者の言い回しを忠実に再現したもの)

→人物の発言を切り取っているため、由来を意識することは少ない。

(例) 「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」・「奇貨居くべし」・「先づ隗より始めよ」・「李下に冠を正さず」

## ◆ 【摘要型成語】 (後人が成語の由来を端的に説明したもの)

→言葉が全体を俯瞰しており、物語(由来)を伴うことで成立する。

(例) 「矛盾」・「愚公山を移す」・「虎の威を借る狐」・「漁父の利」

Cf. 【(日本) 俚諺】 ⇒ 言い切り・完結型

(例) 「急がば回れ」・「論より証拠」・「医者の不養生」

# 【百聞は一見に如かず】（用例①）

## －【引用型成語】の用例から－

### 【中国】

- ◆『漢書』趙充国伝「百聞不如一見、兵難險度、臣願馳至金城、図上方略」
- ◆『後漢書』馬援伝「伝聞不如親見、視影不如察形」
- ◆『陳書』蕭摩訶伝「卿驍勇有名、千聞不如一見」

### 【日本】

- ①道元『正法眼蔵』「俗諺にいはいはく、千聞は一見にしかず、千見は一經にしかず」
- ②『句双紙』「千聞不如一見」
- ③三浦浄心『慶長見聞集』（慶長十九年〈一六一四〉）

「迷はぬ目にて極樂のしゃうごんたのしみを一目見るならば、などか後世をねがはざるべき。故に古人は『千聞一見にはしかじ』とこそ申されしと云」

# 【百聞は一見に如かず】（用例②）

## ④ 林鷲峰『癸卯于役日録』（寛文三年〈一六六三〉）

「豊牧曰「今般法会始末、扨卿往年旧録、以予議之、聊損益而已、百聞不如一見、欲使卿見之、然如近臣森川下総守、亦依触穢、在山下、則卿所遠慮、固宜云々」、既而進朝齋、余独伴食、時令嗣播摩守自其仮屋来焉」

## ⑤ 国枝清軒『近世軍記』（延宝八年〈一六八〇〉）

「古よりの諺に、百聞一見に如かずと申伝へ候。未だ敵の多少も見ずして、進むべき所をすすまざるは、後難遁るべからず」

## ⑥ 松葉軒東井『譬喩尽』（天明六年〈一七八六〉）

「千聞不如一見、千見不如一写」

# 【百聞は一見に如かず】（用例③）

## ⑦古川古松軒『東遊雜記』（天明八年〈一七八八〉）

「善知鳥の宮は芸州巖島の明神をむかし此地へ勸請せしといふのみの事なり。傍に宗像明神といふ社あり。是は御領主津輕侯の御建立の社といふのみにて麿相の事にて、名に聞きしとは大違ひの所なり。百聞一見に不及と、世にはかゝる事の数多あるものなり」

## ⑧山東京伝『忠臣水滸伝』（寛政十一年〈一七九九〉）

「今汝が路を走るのを見たるに、尋常の人の及ぶ所にあらず。尚拾起眼に、当家の号衣を披たるゆゑ、必ず汝ならんと思ひ、且試みに姓名を叫るに果して差ざりき。千聞一見にしかずとはこれらをこそいふべけれ」

## ⑨塩谷宕陰『隔靴論』（安政四年〈一八五七〉）

「有下語虎害者上。一人慄然而懼。色動毛顫。問之則嘗遇虎者也。百聞不如一見。意想不及身嬰。庸人則有之」

# 【百聞は一見に如かず】（用例④）

⑩本居内遠『俗諺集成』（幕末）「千聞は一見にしかず」

⑪池田四郎次郎『故事熟語辞典』（明治三十九年〈一九〇六〉）

【百聞不如一见】百聞は一見に如かず。

【意義】耳にて聞くよりは目にて見たる方确实なるをいふ。

⑫簡野道明『故事成語大辞典』（明治四十年〈一九〇七〉）

【百聞は一見に如かず】（百聞不如一见）

多く人の言を聞くよりは、自ら一见するの确实なるに如かざるをいふ、

⑬藤井乙男『諺語大辞典』（明治四十三年〈一九一〇〉）

【千聞一见に如かず】百聞一见二如カズともいふ。

# 故事成語【百聞は一見に如かず】（まとめ）

（典拠）「百聞」→「千聞」・「百聞」→（近代）「百聞」

「不如（如かず）」⇒ほぼ一貫している

故事成語は原型をとどめたままではなく、いくつかの言い回しを経た上で、**近代に至って現在の形に定着した**様子が窺える（⇒**文体意識**）



言葉は内容理解よりもその品格が重視され、人々の感性に訴えかけるものだったはずである

**= 文体は古いものが求められている**

# 古典教材における文体とは

古典教材 = コード (文法・規則)



様々な読み = コンテキスト (文脈)

古典とは言語との距離感をはかる学科であり、わかりやすい解釈を求めるものではない。  
⇒ そもそも日本人は古い言葉や文体を好んで使ってきた。

(言語レベルでは、「至れり尽くせり」・「悪しからず」・「言わずもがな」・「あり、なし」・「求む」・「現る」・「例えば」・人名「治」、「広」など = **文語表現**)

言語 (≠解釈中心) → 硬質性を求めるもの

(**文体意識**を持たせる指導が必要となる)

# 現代における文体意識

○芥川龍之介「**仮名遣改訂案（\*表音的仮名遣いのこと）**は単に我が日本語の**墮落**を顧みるのみならず、又実に天下をして**理性の尊厳を失はしむるものなり**」（『改造』第七卷三号 大正十四年〈一九二五〉）

- ▶「羅生門」 現行科目「**国語総合（現代文）**」→新科目「**言語文化**」  
なぜ新教科書は「**歴史的仮名遣い**」で表記しないのか？



そもそも我々には**文体意識が希薄**なのではなからうか？

**漢文教材は解釈に念頭を置くのではなく、素読や訓読を通して言語との距離感をはかるもの**

⇒**文体意識**を持たせるのに最適ではないか



## 結論として

(近代) 文体⇒硬質性 (直覚的)

言語との距離感



(現代) 文体⇒親近感 (解釈的)

わかりやすさ重視

新科目「言語文化」の設置

- ▶ 従来の古典教育の意義を改めて見直す必要性も。

改めて最後に.....

▶ 斎藤拙堂「**文章盛衰関乎国家之運**  
**(文章の盛衰は国家の運に関わる)**」

本日はご静聴ありがとうございました。

## 【参考までに】

### 樋口 敦士（漢文教育近著論文）

- ・「故事成語「狐借虎威」教材考－成立の受容の観点に照らして－」（『解釈 67（5・6）』 2021.6）
- ・「戦後文教施策下の漢文教育における道德性の受容－昭和二十年代から昭和四十年代を中心に－」（『早稲田大学国語教育研究』 41 2021.3）
- ・「漢文教材における反証的視点－「矛盾」に着目して（特集 国語教育）－」（『解釈 66(5・6)』 2020.6）
- ・「文体としての漢文訓読－漢文教育の目的と意識をめぐって－」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊 27(2)』 2020.3）
- ・「「先従隗始」考－解釈の二重性とその変遷に着目して（特集 国語教育）－」（『解釈 65(5・6)』（2019.6）
- ・「唐詩「芙蓉楼送辛渐」を用いた実践授業－「平仄」・「詩眼」に着目して－（特集 国語教育）」（『解釈 64(5・6)』 2018.6）